

D-7 幼児の食生活に関する母子の相関について(第2報)

東筑紫短大 綱身節子 ○北島仍子

目的 家族構成、家族形態の歴史的、社会的変化は主婦生活の構造的変化となり、子供の育児態度に大きく影響をもたらすようになった。その中で子供の食生活についての母親の認識、母子関係、子供の嗜好について母親のいかに認知と食行動等母子関係の諸因子を施設、生活階層、地域別に調査、検討した。

方法 調査の対象は北九州市のH幼稚園児300名、K保育所児95名にアンケート法を用い母親に記入を依頼し、それに基づき対照群と実験群を抽出し環境調査、栄養調査、給食時の喫食状況調査、幼児性格診断テスト、親子関係テスト、健康診断等を母親との面接調査を行った。調査時期は1972年9月～10月に実施した。

結果 母親の認知による子供の食嗜好、喫食状況は決定的でなく、幼児の食行動は大きく変化する。偏食児の母子関係は危険地帯の出現率が高く、偏食の有無は体位に殆んど影響なく他の心理的な面において不安定、不適応を示している。こゝに私達の研究の一部を発表する。